

第二次大東亜会議（大東亜戦争・東京サミット）の提唱 名 越 二 荒 之 助

はじめに — なぜ本稿を書くか

私はマレーシアの上院議員であった、ラージャ・ダト・ノンチック氏と親しくしていた。氏は戦時中「南方留学生」として来日し、宮崎の高等農林学校や、陸軍士官学校、東京帝国大学等でも学んだ。会う度に氏が強調していたことは、次の点であった。

「世界史の中で、大東亜戦争くらい正しい戦争はなかった。アジアから欧米勢力を追い払う戦争のどこに間違いがあるというのか。間違いがあるとすると、日本人がこの理想を否定することである。ユダヤ民族は二千年の亡国の中にあっても、民族の理想を失わなかった。大東亜戦争は今もコンティニュー（継続）していることを忘れないでほしい」

氏は昨年2月10日に逝去（72歳）したが、この言葉は氏の遺言のように残っているのである。そればかりではない。台湾の東方工商専科大学の学長である許国雄博士は、毎月1回くらいは来日するが、その「語録」はいつも私の心を解放してくれる。

「近現代のアジア史に於て、日本の果たした役割はすばらしい。どうしてこの事を忘れてお詫びばかりするのか。かつての日本はアジアに輝く太陽のような存在であった。その責任を感じた日本は国家の総力を挙げて戦った。このことをなぜ子供たちに教え、世界にも訴えないのか。子供に誇りを持たせることが教育であり、日本の正義を訴えるのが外交ではないか。そもそも歴史を貫く日本民族の世界的使命は何か。これを忘れたら、民族が地球上に存在する理由がないではないか」

これらの言葉に励まされて、本稿に取り組む次第である。

戦勝国史観で染めあげられた終戦50年

今年は終戦50年になるので、各国ともそれぞれ記念行事を行なってきた。5月には、米、英、露等が、対独戦勝記念日をそれぞれ盛大に挙行了。8月15日にはイギリスが対日戦勝記念式典を持ち、9月2日（ミズリー艦上で日本が降伏文書に調印した日）には、米、露、中等の諸国が、対日戦勝記念行事を行なった。

これらの式典は、国によって内容は少しずつ違うが、日本を戦争挑発者と見、全体主義国と断定し民主主義の勝利を祝う点では共通している。何より日本の首相が8月15日、自国を侵略国家のように語り、迷惑をかけたことを謝罪している（首相談話の形）のだから、日本も戦勝国の主張を追認したことになる。

いずれにしても終戦50年の今年は、世界が挙げて（露骨か否かを問わず）日独の侵略性を断罪し、戦勝国史観で染めあげたことになる。何という単純さであろうか。

そもそも歴史観は多様であって、一色に染めあげることが、発想能力の衰弱であり、愚かださえある。勝った方が正しく、負けた方が不正ではないし、また逆に負けた方が正しく、勝った方が不正でもない。歴史は正邪善悪で裁けるものではない。勝ったからといって驕り、負けたからといって卑屈になることぐらいつまらぬことはない。もし日本に成熟した歴史観が確立され、健全なる外交感覚があったら、大東亜戦争に関係した米、英、蘭、露等をはじめアジア各国を招いて、東京で近代史総括の国際サミットを行なうに違いない。時期としては、大東亜会議（昭和18年）が開催された11月4日・5日がふさわしい。12月8日の開戦記念日でもよい。

このサミットでは、そもそも大東亜戦争が起った原因は何かを、公平多面的に取りあげるべきである。この場合少なくともアヘン戦争（1840—42）に遡らなければ、歴史の説明はつかないであろう。西欧列強の東侵に対して、アジア諸民族はいかに対応したか。日本が登場した日清・日露戦争から大東亜戦争までと、日本敗戦後の50年間に米英露をはじめアジア諸国は何を得、何を失ったか。百数十年間にわたるアジアを舞台にした戦争をどう総括したらよいのか、各国の立場を踏えて率直に述べあえば、大きな教訓をもたらすに違いない。ここでは日本が主宰する「大東亜戦争・東京サミット」に於て、各国はどのような発言をするであろうか。

私はここにアジア史を中心とする、ダイナミックな「歴史サミット」を描き出してみたい。サミットがこのような発想に立つまでには、相当の準備と、各国への説得が必要であろう。今すぐ実現しないにしても、日本民族が世界安定のリーダー役たるための悲願をこめて、デッサン風ながらモデルを示してみたい。

米 国 — 天網恢恢疎にして漏さず

この国際会議は日本が主催国だから、司会は当然我国が勤める。司会役はまずアメリカ代表に発言を求めることになる。

司 「第二次大戦で最も大きな役割を果たしたのは何としてもアメリカである。アメリカはこの戦争をどのように評価し教訓化しているか。建前としては『民主主義の勝利』を公言してきたが、本心は決してそうではあるまい。建国の偉人・ワシントン大統領は、三選を乞われてもそれを断り『訣別の辞』の中で、国家政策を行なうに当って、特定の国に対して好悪の感情を抱くことを厳にいましめている。にも拘らずヨーロッパ戦線ではヒトラー・ドイツを極端に憎み、英国に好意を持ち過ぎ、ソ連まで支援した。そのため戦後スターリン・ソ連の大進出を許してしまったではないか」

米 「なかなかよい所を衝かれた。ルーズベルト大統領は三選どころか、四選までした。四選目の途中で急死したが…。第二次大戦の戦争指導を間違った方向に向けたのは、ブルドッグのような喰らいついたら離れない一本調子のチャーチルと、イデオロギーの判らないルーズベルトの幼児性に責任がある。そもそも英国の外交政策の伝統は、ヨーロッパ大陸に二つの強国を共存させる事だった。にも拘らずチャーチルはドイツを憎み過ぎ、アメリカを強引にヨーロッパ戦線に引っ張り込み、ソ連と手を結んだ。

米英にとっては、独ソ戦がよい転機だった。米英はソ連を支援せず、高みの見物を決め込むべきだった。独ソの双方を戦わせて、ヘトヘトに疲れさせるべきであった。ドイツが負けそうになったら、ドイツを支援するくらいの腹芸が必要だった。独ソとも国力を消耗しきった所で、アメリカが仲裁に入るべきだった。そうすればヨーロッパの覇権を狙う独ソ両国の出鼻をくじき、アメリカは戦わずしてヨーロッパから尊敬され、影響力を行使できた。これがワシントンの遺訓であり、イギリス外交の伝統だった。チャーチルは目先の事しか見えず、ルーズベルトは『プロレタリア民主主義』を唱えるソ連のイデオロギーが看破できなかった。考えても見よ、ドイツは元来資本主義国なのだ。彼はヒトラー・ナチスの本質と活用方法を知らなかった。このような批判は、共和党あたりを中心に、戦争中からあったし、次第に常識化しているのである」

司 「なかなか率直でよろしい。アメリカはアジア戦略でも似たような失敗を犯したのではないか」

米 「アジア戦略も大失敗だった。支那事変の時、アメリカは蒋介石の支援をやめて、早く仲裁に入るべきだった。日蔣が戦えば、得をするのは共産陣営だということは、当時フーバー元大統領などは指摘していた。ルーズベルトは共産主義の本質が判らず、日本を憎み過ぎたために、『資本主義相互間の闘争』を狙ったスターリン戦略に、まんまとやられた。そのために共産陣営の大侵略を許してしまった。アメリカは何のために戦争したのか、という批判は今でも根強いものがある」

司 「それに日本に対する占領政策がよくなかった」

米 「その通りである。占領軍はその国の法律、習慣、宗教等を尊重しなければならない（1907年・ハーグで結ばれた『陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約』）のに、こともあろうに憲法まで押しつけてしまった。それに平行して極東国際軍事裁判によって、日本を犯罪国家として裁いた。連合国の行為は棚にあげ、そのうえ罪刑法定主義の原則に反し、過去に遡って裁いたのである。更に事後検閲で、マスメディアをコントロールしたために、根が従順な日本人の魂まで抜いてしまった。いやひょっとすると、現在の日本は世を忍ぶ仮の姿で、逆にアメリカを裏であやつっているのかも知れない、と思うことがある。

聞けば東洋には、『天網恢恢疎にして漏さず』という言葉がある。この言葉のように、天は全てを見通しているのである。日本占領の因果はたちまち米国に巡ってきた。日本を身動きできないようにしたために、日本がアジアで果たした役割を米国が担わなければならなくなった。日本に代わってアジアの安定のため米国は朝鮮戦争やベトナム戦争を戦い、太平洋戦争以上の犠牲者を出した。この戦争で英国は植民地の全てを失い、米国は共産主義の大侵出に立ち向かわねばならなくなった。何のために戦争したのか。米英の戦争指導の拙劣が強く印象づけられる。これからは徐々に、アジアのことはアジアにまかせてゆきたい。これが戦後50年の教訓である」

中国 — 二つの反省と日本への感謝

司 「米国の反省はダイナミックであり、誰も反論できないのではないか。次にアジア史にあって、太古以来主役を勤められた中国に願います」

中 「中国はアヘン戦争という正義の戦争に簡単に敗れた。中華帝国を誇っていた大清国が、なぜ敗れたのか。相手は海軍力しか持たない英国であった。内陸に引き込んで戦えば、負けるはずはなかった。しかし国内は主戦派と主和派に分裂して簡単に敗れた。そのため不平等条約を押しつけられ、それが半植民地化の端緒となった。もしあの時清国が腰を据えて英国と戦い、追い払っていたら、その後のアジアは中国を中心に安定していたであろう。従って中日戦争も大東亜戦争も起らなかった。これが反省の第一点である。

続いて1895年、甲午中日戦争（日清戦争）で清国が敗れた。その結果遼東半島を日本に割譲することになった。東夷の日本に中国の要衝が奪われることは、何としても耐えられなかった。そこで露、独、仏三国に干渉を依頼して、遼東半島を取り戻して貰った。するとその報酬として露は旅順、大連、独は膠州湾、仏は広州湾、さらに英は威海衛を租借というように、中国分割が激化した。夷を以て夷を制する遠交近攻外交が、自ら墓穴を掘る結果を招いた。これが反省の第二点である。

続いて日露戦争だが、日本はよくぞ戦い、そして戦った。もしあの戦争で日本が負けていたら、満州はロシア領になる。そして満州を手に入れた国は、かつての日本のように必ず南下する。すると中国大陸を舞台に、中日戦争（日本側で言う支那事変）ではなくて『中露戦争』が起っていたであろう。その時中国大陸に權益を持っている独・英等はどう対処するか。いずれにしても中国大陸は争乱の巷と化していたに違いない。

次に1937年（昭和12年）から終戦まで戦われた抗日戦争（支那事変）に移ろう。日本軍は合計8年間にわたって中国大陸に侵入した。蒋介石政権は重慶に逃げ込み、日本軍を大陸に引き込んで奔命に疲れさせる戦略をとった。一方蔣は米・英の支援を受け、ソ連とも結んで抗日戦を続けた。蔣の遠交近攻戦略である。日本はそれを見抜くことができず、広大な大陸で徒労を重ねた。その間中国共産党は力を蓄え、日本が敗戦すると、疲れた蒋介石の国民党軍に攻撃を加え、一挙に中国大陸を席捲した。日本軍の力なくして我々はとても政権を獲得できなかった。これが日本軍に感謝するコメントの第三点である。

さて中国共産党は政権を獲得したが、大中華をまとめるためには、国内に精神的支柱を確立し、対外的には、敵を設定する必要があった。それが毛沢東思想の宣伝と、対ソ・対日敵愾心の育成であった。その後毛沢東思想はあせてきたし、ソ連は崩壊した。日本に対しては“侵略行為”をとりあげ、南京大虐殺や七三一部隊を使って日本のマスコミを使嚇してきたが、この神通力はいつまでも通用しないであろう。今は『社会主義市場経済』による『改革解放路線』で押しまくっているが、中国統一の原点を何に置いたらよいか。御教示を頂きたい最後の点である」

司 「次々と大胆な指摘を頂いて感謝している。日本の教訓は最後に述べることにして、次にロシアの登場を願います」

ロシア — スターリン戦略のツケ

露 「ツアー政権を倒したのはレーニンだが、『ソ連邦』という特異の国家の骨格を造りあげたのは、スターリンだった。その彼は第二次大戦を『資本主義相互間の闘争』と見て、日独対米英を戦わせた。日独が敗れると、そのチャンスを生かして一挙に共産圏を拡大した。対日関係で言えば、ソ日中立条約を破棄して、満州・樺太・千島を占領し、戦後は60万の日本人を抑留した。抑留された日本人は、自発的に『スターリン大元帥への感謝署名運動』を展開した。捕虜になりながら日本兵は感謝したのだ。当時のソ連がいかに凄かったか、歴史に残る『快拳』といえるかも知れない。

いずれにしても、スターリンが支配したソ連は、欧亜にまたがる大範囲を支配下におさめ、資本主義国に敷設した各国共産党は、忠実なるソ連の尖兵であった。文字通り『二十世紀は共産主義の世紀』と評価されていた。しかしそれも束の間、世紀末に至ってソ連共産党は消滅し、ソ連邦は崩壊してしまった。現在は『二十世紀は、共産主義の愚かさを見せつけた実験劇場』などと揶揄される始末である。やはりレーニン

のように革命の戦術にいくら長けていても、またスターリンのようにいくら外交戦略に成功しても、国家形成の基本原理が間違っていたら、最後は自己崩壊するものだ。マルクス主義という空想科学にマインド・コントロールされた民族の悲劇を、世界にお目にかけた。これからは覇権主義を排して伝統に基づくロシアの真姿を発見し、顕現する発想に立たねばならないと思っている」

司 「次々に透徹した意見が開陳されて、会を主催した国として、冥利につきる。それでは我国に一番近い韓国の意見を聞きたい」

韓国 — 統一への宿題

韓 「我国は日本の一員として戦ったが、敗戦によって“光復”がもたらされた。しかし米ソ両大国によって南北に分断された。独立したといっても、“分断独立”に過ぎない。北韓はソ連によって、韓国は米国によって与えられた独立であって、自力で獲得した独立とは言えない。

分断されたまま韓国は、戦後50年、米国と相互防衛条約を結び、反共と反日を方針として独立を保持してきた。だが米国が撤退して、統一した独立国になれば、北から中・露の圧力が加わり、南から日本の風圧を受けることになる。その中間に立つ半島国家として如何に生きのびたらよいか。中・露両国を宗主国とするのは嫌だし、再び日本に併合される屈辱には、尚耐えられない。これから統一コリアが独立を保つためには、核兵器をちらつかせながら、日・中・露三国に対抗する防衛力を身につけるか、それともこれら三国に祝福されながら緩衝地帯となって、スイスのような役割を東アジアで果たすか、ご意見を聞きたい」

ミャンマー (旧称ビルマ) — 独立の原点はどこにあったか

司 「これからアジア各国に登場を願うのだが、それぞれ独立の事情や戦後の歩みが違う。全員の見解を紹介する時間がないので、ここでは日本でも評価の分れるミャンマー代表の意見を聞くことにする」

ビルマ 「さきほど韓国代表が、朝鮮も韓国も与えられた独立であって、自力で獲得したものではない、と言われた。同様のことは本日の主催国である日本についても言える。日本は1951年、サンフランシスコ条約に調印し、翌年発効したが、自らの力で達成した独立国とは言えない。憲法そのものが米国製であって、その前文には、『諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した』となっている。諸国民に頼って生存する、というのだから、とても独立国とは言えない。

ところがその日本は大戦中、我々アジア人に対して『独立は他国に頼らず、自力で獲得するもの』と教え、『自国本来の歴史伝統に回帰せよ』と強調していた。皮肉にもその日本は、与えられた独立に甘んじ、自国の伝統への誇りを忘れてるように思われてならない。

今アジアを見渡した所、自力で独立を達成した国がいくつかある。インドネシアは日本敗戦後、イギリス、オランダと約4年間戦い、遂に独立を獲得した。その背景には、日本軍政下に教育したペタ（祖国防衛義勇隊）の独立精神と、千人を超える日本軍人が、独立戦争に参加したことを無視できないのである。

そしてもう一つ無視できない国は、インドである。チャンドラ・ボーズ率いるインド国民軍（INA）は、インパール作戦を日本軍と共に戦った。日本が敗戦すると、英国はINAの指導者を、デリーのレッド・フォートで軍事裁判にかけた。するとそれに猛反対する国民運動が、インド全土に広がった。この運動がインド独立に繋がった。インドは自力で独立を獲得したのである。

同じ頃東京では、極東国際軍事裁判が、同時的に進行していた。それに対して日本人は、マスコミを始め一斉に極東裁判に便乗した。パール判事による日本無罪論があるにもかかわらず、今も極東裁判の判決を支持して、自国を犯罪国家のように信じている者が多い。戦前の日本人と戦後の日本人を較べて、これが同じ日本人かと、目を疑うばかりである。

さて我がミャンマーである。我国は11世紀以降、パガン朝、トンギー朝、アラウンパー朝というように、栄光の帝国を築いてきた。ところが、1824年以来、3回にわたって対英戦争を挑み、遂に1885年国王は流刑され、英国の植民地になってしまった。その後のビルマを激励してくれたのは、日露戦争に於ける日本の勝利であり、その後の日本の隆々たる発展であった。オッタマ僧正やヴィサラ僧正は日本に感謝し、反英運動に身を投じ、二人とも獄死した。これがビルマ独立の精神的根源となった。

大東亜戦争が近づいた1940年8月、日本の南機関（鈴木敬司大佐）はオン・サンヤネ・ウィン等30人の志士を海南島に集めて軍事訓練を行なった。開戦と共にビルマ独立軍（BIA）を編成し、ビルマに進撃した。ビルマ国民は日本軍とBIAを

歓呼して迎え、僅か5ヶ月で英軍を追い払ってしまった。やがて1943年8月1日、バー・モウを首班（オン・サンは国防大臣）とする『ビルマ共和国』が誕生した。ビルマ人の歓喜は絶頂に達したが、栄光は永くは続かなかった。日本軍がインパール作戦に敗れると、ビルマから総退去せざるを得なくなった。バー・モウは日本を裏切らず、日本に亡命した。もしオン・サンも亡命したら、ビルマは再び英国の植民地になってしまうであろう。オン・サンは1945年になると『反ファシスト人民民主連盟』を結成し、さらに親英的な『ビルマ軍』を組織して日本に矛先を向けた。このあわただしい動きの中であってその年の9月、オン・サンは正式に首相に就任、制憲議会選挙と独立を英総監に要求し、アトリー英首相との間に独立協定が調印された。時に1947年1月、彼は親日路線よりも独立路線を選び、危機一髪で独立に成功したのである。

しかしオン・サン政権は容共派で占められていた。危機感を抱いたウ・ソー元首相一派によって7月19日、オン・サン等7閣僚が暗殺された。時にオン・サン32歳。

そのため、その後のビルマは軍部独裁の社会主義路線（社会主義計画党）を歩み、今や世界最貧国の一つに数えられるようになった。北方にはシャン族、カレン族等独立志向の民族を抱え、スー・チー女史の力量ではとても収拾できるとは思えない。ここにミャンマー連邦の悩みがある」

最後に日本代表の挨拶 — 大東亜戦争の遺産とアジアの進路

日 「本日は過去百数十年に及ぶアジアの戦争について、各国代表は自国の立場を踏まえながら、率直に見解を表明して頂いた。参加各位の発言は、まさに『和して同ぜず』というべきか『同ぜずして和す』というべきか、国際間のあり方をさながら示されたように思う。まだ充分とはいえないが、これを契機にこれから毎年『歴史サミット』を開催し、更に問題点を深めてゆきたいと思う。

さて我国が主役となって戦った大東亜戦争だが、我国に協力して頂いたアジアの諸盟邦に対して一言申しあげたい。終戦の詔書には、『東亜解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セザルヲ得ズ』とある。我国がまず感謝し、遺憾の意を表する相手は、戦争中我国の正義と勝利を信じて協力したアジアの戦友たちに対してである。不幸にも我国が敗戦したために諸盟邦の指導者たちは悲劇の境涯に追い込まれた方々が多かった。更めてここに深甚なる陳謝の真心を捧げる次第である。そしてもう一つ、我国が敗戦したにも拘らず、アジア諸国は独立心を奮い起して、見事に独立を達成せられた。この英雄的行為に対して心から敬意を表し、遅ればせながらここにお祝いを申しあげる。

そしてついでに触れさせて貰えば、独立の波はアジア諸国のみならず、中近東からアフリカ諸国にまで及んだ。英国の歴史学者アーノルド・トインビーはこの事について『日本人が歴史上に残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去二百年の間に考えられていたような、不敗の半神でないことを明らかに示した点にある』（1956年・オブザーバー紙）と述べているが、日本はこ

の言葉を振りかざすつもりは毛頭ない。戦争を評価して『侵略』とか『解放』とか、『加害』とか『被害』とか論議しだしたら、收拾がつかなくなる。歴史は批判したり評論したりする対象ではない。深く相互の立場を理解することによって真実に近づくことができる。あとは歴史は歴史に語らせるのみである。

さて、問題はこれからのアジアについてである。アジアはそれぞれ独立したとはいえ、我国をはじめ各国とも重大な課題を残している。特に我国に対する先程のミャンマー代表の指摘は本質を衝いていた。その他南北に分断された韓国と朝鮮の統一と独立の問題、広大な領土と人口を抱えたロシアや中国の課題等、アジアは多様であり、複雑であり、我国を含めて深刻な宿題を抱えている。その中であって、特に申しあげたいことは、大国をもって任じている中国とロシアに対してである。第二次大戦後、独立国の数は約3倍に増えた。民族、宗教、人種等、多様な価値観を認めあうことが、世界安定への道である。領土が広過ぎる国よりも、価値観を共有する適性規模の国ほど繁栄し充実することも、戦後50年の経験から得た知恵である。英国は戦後『英連邦』という緩やかな連合体を作ったが、『ロシア連邦』『中国連邦』という発想は如何なものか。

そして最後に訴えたい。アジア諸国には共通した文化遺産がある。これを掘り起して、共鳴の輪を広げようではないか。そして自国の防衛を、外国勢力に依存することも考え直したらどうか。米国はやがてアジアから撤退するであろう。その時アジア諸国は同時に不戦の決議を行い、そして同時に軍備縮小にも向かいたいものである。一国だけが謝罪決議を行ったり、一国だけが不戦決議をしたのでは、調和あるアジアの発展にはならない。同時的決議を提唱する所以である」